

「ただいま。今日も疲れたよ。」

毎日玄関から聞こえる帰宅時の母の声。その声はとても疲れてはいるが、どこか充実した張りのある声です。そして何よりもキラキラした母の姿。私の母は臨床検査技師という仕事に就いています。毎日とても大変そうですが、母の姿は、太陽の光を浴びて光輝く海のようにです。そんな母の背中を毎日見ている、いつしか私も母と同じように医療関係の仕事がしたいと思い始めました。

医療関係の職業の中でも、私の将来の夢は精神科医になることです。きっかけは、ある悲しい出来事でした。私の祖母は大切な娘を亡くした経験をしました。私は、そのとき祖母の話を書くことしかできませんでしたが、祖母の気持ちを大切にしながら懸命に話を聞きました。すると、ほんの僅かでしたが、祖母の表情が明るくなりました。先の見えない暗闇に一筋の光が差したようでした。その時の喜びは今でも私の心に深く刻まれています。患者との対話から全ての治療が始まる精神科医という仕事は、対話がとても大切になります。私は自身の経験からも、心に傷を負った人たちにとって対話がどれほど大切なことがわかりました。そして、祖母に言われた「相手の立場に立って話を聞くことができる性格は精神科医に向いているよ。」という言葉から、自分の目指すべき道が見えてきました。

精神科医になるということは、とても大変で、中途半端な気持ちでなれる職業ではありません。しかし、母の仕事への向き合い方に触れたときに、私の気持ちは固まりました。

ある時、母に「なぜ臨床検査技師になったの？」と聞いたことがありました。「とにかく人の役に立ちたいという気持ちが全てで、人間の命というこの世で一番大切なものと常に真正面から向き合っているという誇りをもてるからだよ。時には患者さんの役に立てず、とても悲しい思いをすることもあって、そんな時は本当に辛くて辞めたくなることもたくさんあった。でも、逆に、患者さんの命を救うことができた時は、喜びという言葉では表現できない位、充実した気持ちになるんだよ。患者さんの周りには家族をはじめ患者さんのことを大切に思う方々がたくさんいて、患者さん一人の命ではない。患者さんだけではなく周りの方々の笑顔を見ることができた時は、本当に命を救えてよかったと思う。」

この母の言葉から、母が毎日本気で命と向き合い、この仕事に誇りと自信をもっていることがわかりました。あの日、母の言葉を聞いて、自分は精神科医として働くことと決意することができました。

そこで、母に自分の思いを打ち明けました。精神科医の仕事は本当に大変で、体力も精神力もかなり必要と言われました。また、大変なことや辛いことが大半であり、相当な覚悟がないと務まる仕事ではないということも教えてもらいました。母の顔には「心配」という文字が書いてあるようでした。苦労するのは間違いない職業に、娘が就くことを心配する気持ちはよくわかります。また、私が想像しているよりずっと、現場は大変だということもわかりました。しかし、それでも私の精神科医になりたいという気持ちが揺らぐことはありませんでした。母の姿に憧れ、心から尊敬しているからこそ、同じ医療関係の職業に就きたいと考えています。

私が将来の夢を叶えるためには、体力も精神力もまだまだ足りません。今私が中学生として取り組んでいる全てのことは、必ず将来の夢を叶えることにつながると思い、目の前にある一つ一つのことにも真剣に取り組んでいます。将来、夢を叶えて、心の病で苦しんでいる人たちと真正面から向き合い、寄り添うことで少しでも気持ちを楽にしてあげたいです。そして、患者さんが少しずつ前に進めるようにサポートしたいです。いつの日か、母と同じ病院で、同じ制服を着て誇りをもって働くことができるよう、相手の気持ちがわかる心の広い人間になりたいです。閉ざされた心のページを開き、患者さんの人生という物語の次の1ページに進むきっかけを私が作ります。